

●台湾と沖縄

台湾に最も近い日本、与那国島

黄 智慧

●台湾と日本の境界

「台湾出身」であることをばからず口にして日本に住んだ、あるいは留学した台湾人なら、だれでも似たような経験があるだろう。たいていの日本人は、こちらが出身地を言うと、がっかりするほど台湾という場所へのなじみのなさをあらわにするものだ。

今世紀の前半、台湾と日本の間には「国境」とよぶべきものはなく、それどころか台湾島内では同化をめざして「一視同仁」なるスローガンがあまねく叫ばれてさえた。その時代はともかくとして、二〇世紀も終わろうとしている現在、自国のすぐ南の隣国である台湾に対する日本人の関心や好奇心はといえは、相変わらず遠い欧米諸国にはるかに及ばないものようだ。

このように隔たりのある日本と台湾だが、そもそも越えてはならない国境とはいったいどこにあるのだろうか。

飛行機で両地を行き来するたびに、私はこの問題を考えずにはいられない。感覚的にいえば、一方の空港から入ってもう一方の空港から出て来る、あるいはこちらの税関からあちらの税関に並ぶだけのことだ。二、三時間の空の旅では、境界線は何も見えないし、何にも触れることはできないのである。

こうした感覚のなかで、一九九三年三月、与那国島を訪れた私は、着いた初日に島の人から聞かされた言葉になんともいえない興奮を覚えた。この島から遥かに台湾が望めるというのだ。とうとう国境に触れることができような気がした。島の人によると、毎年夏から秋にかけて時期の数日間だけだが、午後から日暮れ時にかけて、島の西側の海上に台湾が姿を見せるという。なだらかな山並みが連なる島影は、実に壮観そのものだそうだ。私に話してくれた人は、「まるで『大陸』みたいだよ、こ

訳：胎中千鶴

んなふうにな」と真顔で自分の両手を胸の前でいっぱい広げてみせた。

与那国島は面積約三〇平方キロメートル、八重山諸島に属し、沖縄の最西端、日本の最も西に位置する国境の島である。緯度は台北より低く、台湾東部の都市・宜蘭からわずかに約一〇キロの距離だ。島の西端に西崎いりざきとよばれる場所があつて、台湾の島影はその沖合に年に数回だけ姿を見せるといふ。

西崎の付近に、島にとって最も重要な天然の良港、久部良港くぶらがある。この辺には、サンアイ・イソバという女傑が、勇猛なる神通力を使つて、島を荒らしに来る海賊を撃退したという伝説が残っているほか、祭りの儀式のときに、海に大草鞋わかしを流して対岸に住む異人を驚かしたという言い伝えもある。一説には、海を漂う大草鞋を見た台湾の「人喰い族」に、与那国島には巨人が住んでいると思ひ込ませ、彼らを脅して島に近づけないために行われたのだとされている。この伝説は、日本の民間伝承のなかでも異彩を放っており、他の地域では類をみない。だが、これらは一〇〇年前に書かれた旅行記にその記述がみられるものの、当時でさえその儀式を自分の目で

見た者はいなかった。大変珍しいことに、八重山諸島全体の史料や民間伝承のなかで、古代人と台湾の間にあつたであろう「対外関係」に言及しているのはこの伝説だけだ。その意味では、貴重な口頭伝承の資料だといえる。ただしそこに登場する台湾のイメージは、友好的というより多分に恐怖の対象として映っているのだが。

●「国境」のなかつた時代

島に着いて数日後、ある同窓会の会場で与那国島の伝統舞踊と民謡が披露されることを耳にした私は、主催者の好意で見学させてもらうことになった。

与那国島では同窓会が盛んに行われている。とりわけ戦前には小学校が一つしかなかったため（与那国小学校はすでに創立一〇〇周年を越えている）、同じ年齢の子供たちはだいたいがみなクラスメートというわけだ。彼らは生まれ年の干支えとにちなんだ名をつけた会を作り、卒業後も定期的に集いをもち続けている。その日私が参加した「竹馬会」（「竹馬の友」の意もある）は、大正七年ウマ年生まれ、当年七五歳の老人たちによる同窓会だった。出席者は約二〇人。そのうちの多くは島外に住んでいるが、こういうチャンスはめつたにないからと、こぞって生まれ

故郷に帰ってきた。だれもが幼い頃のお国なまりや踊りを懐かしんでいる。

私が台湾から来たと知ると、会長は喜んで席をすすめてくれた。彼は開口一番「ここにいる者はみな若い頃に台湾で暮らしたことがあるんですよ」と私に語りかけた。私は驚きのあまり訝しげな口調で問い返してしまった。

「みんなですって？ 本当に？」

見まわすと、座を囲む白髪のお年寄りたちは一様に真面目な表情でうなずいている。語り合ってみると、戦前の台湾については、私よりよほど詳しい。一人一人がそ



日本最西端の地、与那国島西崎にある碑。

れぞれ、かの地にまつわる物語をもっているのである。

●台湾の経験

台湾で生まれた人、進学した人、医師や美容師、看護婦、機関士などの資格を取った人々。台湾で職をもち、結婚し、子供をもった人。戦争中に台湾で兵役について人もいれば、台湾に疎開し、病を得て命を落とした人もいる。戦前の与那国島の人々から見れば、台湾は八重山諸島の中心地である石垣島よりも、実質上近い距離にあった。それはたんに客船や貨物船の定期便が基隆―祖納港間を行き来していたからだけではない。当時「リトル東京」と呼ばれていた台北からは、那覇よりも数段早く、近代的な知識や情報を豊富に得ることができた。だから台湾に出かけて職を求めたり進学したりすることは、戦前の当地の若者にいわせればごく当たり前の、日常のことだったのだ。

戦前の与那国島では、島民の暮らしは主に台湾の市場に支えられていた。漁民たちは早朝、久部良港を出ると途中の漁場で漁を行い、夕刻、台湾の蘇澳港で魚をおろし、晩に蘇澳港を出発、再び魚をして、翌朝、久部良港に帰って来る、というのが普通だった。そのうえ、台湾

に出稼ぎに行った者が大量に仕送りを寄こしたので、島では日本銀行券より台湾銀行紙幣の方が多く出まわっていた。当時の島民たちは、税金を納めるときも台湾紙幣を使ったため、村役場の金庫には台湾紙幣があふれていたという。そこで石垣島の税務署に県税を納付する際は、役場の者が島内の商店をまわって日本銀行券と交換してもらおうのが常だった。

このように、戦前の与那国島の産業と経済は、ほとんど台湾経済圏に組み込まれていたといつてよいだろう。

もちろん当時「国境」はなかった。それどころか与那国島の村役場では台湾と同じ「西部標準時」を用いていた。那覇や日本本土とは一時間の時差があったというわけだ。

●台湾人の八重山体験

一方、かつては台湾人も、八重山地区に自由に出入りができた。なかでも有名なのが、昭和初年に始まった台湾農民の入植だろう。彼らはもともと台湾の西部平原の出身で、八重山諸島では比較的広い平原がある石垣島に居を定め、バナナップルの栽培を主とする農業に従事するようになった。また西表島では三井が石炭の採掘を開始したので、台湾の鉱山労働者が仕事を求めて来るよう

になった。

前者の場合、勤勉な仕事ぶりで、石垣島の人々や風土に溶け込み、後からつてを頼って親戚や友人も続々と入植した。その結果として、現在まで続く石垣島独特の台湾人コミュニティが形成されたのである。しかし西表島の場合はそうはいかなかった。炭鉱の労働条件は苛酷をきわめ、人々は逃亡を試みることもあった。

次の話は、与那国島の八八歳の老婆が話してくれたものである。彼女は祖父からこの話を聞いたという。

西表島で石炭の採掘が始まったのは昭和初年。その労働環境は劣悪で、この世の地獄にたとえられた。日本各地から労働者がやって来たが、その生活たるや、毎日一五時間以上も休みなく地下で作業を強いられたうえ、外出は厳禁、給料も炭鉱内でしか使用できない私幣で支払われた。逃亡を企てて捕らえられたら最後、ひどい拷問を受けてはなほだしい場合は死人同様となり、命を落とすことさえあった。幸運にも逃げおおせた者はごくわずかにすぎない。

ある日のこと、台湾出身の一〇人の労働者が、どのようにしたのか「漁音丸」という船に潜んで与那国島に逃

亡をはかった。島に着いた彼らの境遇を心底哀れに思った与那国の人々は、労働者たちを村人の家や山の作業小屋など数カ所に分けてかくまうことにした。

二日も経たぬうちに、密告で行方を知った追手が四、五人、西表島からやって来た。彼らは到着するや全島くまなく搜索をしたので、とうとう作業小屋の見張り役が連中と衝突してしまつた。からくも逃げきつて里までたどり着いた見張り役は、すぐに島の青年団に助けを求めた。そこで若者たちはただちに村人を招集し、そのなかに老婆の祖父もいた、一団となつて追手が投宿していた民家へ押しかけ、謝罪を要求した。話し合ひは不首尾に終わり、再び両者は衝突したが、何といつても多勢に無勢、島民にこてんこてんにやられた追手は、ほうほうの体でその夜のうちに島から退散したという。

その後、島民はこの労働者たちを全員無事に台湾へ送り届けた。与那国島の人々の厚情に、これぞ命の恩人と感じ激した労働者の一人が、後日謝意を告げに訪れ、記念として島に大きな銅鑼どらを贈った。村役場はこの銅鑼を時を告げるために用いることにしたのでさうである。「毎日正午になるとね、銅鑼の音が村中に響きわたつたもの

だよ」と老婆は楽しげに語つてくれた。

それにしても、当時の与那国島の人々は、どうして台湾人の逃亡者を助けようと思つたのだろう。もし仮に相手に親近感も何もなかつたなら、わが身を挺してまで救おうという気にはなるまい。日頃から台湾人に親しみを感じ、心が通じ合つていたからこそ、自然にそのような行動をとつたのではないだろうか。

●戦後の関係

太平洋戦争の終結は、この小さな島にも深刻な打撃と不安を与えた。台湾への出稼ぎ者はみな送還されてきて、島の人口は五〇〇〇―六〇〇〇人に激増した。一時期島には失業者があふれ、台湾との経済ルートも危地に立たされた。行政面では、沖縄のアメリカ軍が接収・管理を進めたが、はじめアメリカ軍は南部の宮古諸島と八重山諸島については接収を考へていなかった。そこでこの地域の帰属問題が住民の大きな不安の種となつた——いつたい自分は「何国人」になるのだろう。

一九四九年、与那国町長選挙を前にして、三人の立候補者がそれぞれ異なる意見を主張した。一人は日本復帰論、一人は琉球独立論、そしてもう一人は与那国島を台

湾に帰属させるべきだというのである。三者は争い、その結果日本復帰論を唱えた候補者が当選した。数ある沖繩の島々のなかで、こうした論争が繰り広げられたのは与那国島だけだったという。

台湾との親密な関係は、戦後この島に未曾有の繁栄と好景気をもたらした。以下に述べるのは、戦後初期、一九四六年夏から四九年秋にかけて行われた「密貿易」に關する、与那国島の住民ならだれでも知っている事実だ。

戦争が終わっても、漁師たちは相変わらず久部良港から漁に出て、蘇澳港で魚を売りさばくという生活を続けていた。しかし蘇澳港市場での彼らの活動は、次第に中国大陸から来た兵士たちの妨害にあうことが多くなった。漁師たちは旧知の人脈につてを求めたから、いきおい港での取り引きは地下にもぐらざるをえない。しかも当時の与那国島は人口の大量流入で食料や生活物資が極度に不足していた。蘇澳港で魚をおろしたあと、食料や物資を購入して久部良港で転売すると、目をみはるような取引になったのである。こうして当初は漁民が中心だった両港の交易に密貿易ルートが形成されていった。

密貿易ルートはたちまち近隣の港から注目され、久部

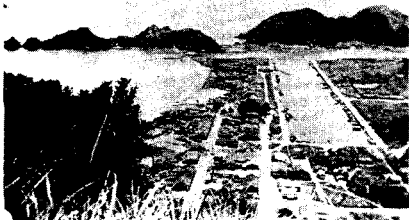
良港には船が続々と集まるようになった。さらには遠く沖繩本島や日本本土、香港からも交易船がやって来る。最盛期には一日に六〇〜八〇隻が久部良港に押し寄せた。当時は戦後の混乱期で、各国の金融政策はまだ安定せず、貨幣価値の変動も激しかった。そこで各地域から来た交易船は「バーター（物々交換）方式」という独特のスタイルをとったのである。

台湾からの船には、コメや砂糖、茶、果物、日用品、タバコ、酒、ペニシリンをはじめとする薬品などが満載されていた。日本で唯一地上戦の行われた沖繩本島からは、弾薬や銃器類、金属、火薬、ゴム、米軍の軍服、絨毯、薬品などが運ばれた。日中、密輸船は港の外に停泊し、船主が港に来て商談をまとめる。夜になるとサンパ（はしけ）に貨物を載せ、港内に搬入するのである。久部良港は夜がふけても人の往来が絶えず、夜明けまで明かりが消えることはなかったという。

こうして台湾の東方海上に一大密貿易港がつけられたことを、与那国島の人々は大いに歓迎したようだ。警察が黙認したばかりではない。一九四八年、村役場は大火で建物を全焼してしまった。そこで青年団は、密貿易船



与那国島の西端に位置する久部良港。



昭和6年当時の蘇澳魚港。朱素純女史提供。



花蓮市。台湾東部唯一の大都市。与那国町と姉妹都市関係を結んでいる。

から港湾使用税を徴取することを考えついた。彼らは税金として納められた酒や砂糖を本土で現金に換え、建築材料を購入した。その結果、短期間で以前の倍の規模を誇る役場を自力で完成させることができたのだった。

しかしなにより重要なことは、密貿易が与那国島に大量の雇用機会を与えたことだろう。船主や船員以外にも、港の担ぎ屋や飲食業、旅館業などに、人々が押しかけた。島の人口は一九四六年末には八〇〇〇人に達し、ついに町に昇格、八重山諸島唯一の「一島一町」となった(八

重山の他の島々は、全人口を合計してようやく町になる程度だつた)。

当時この島では担ぎ屋の一晩の収入が少なくとも教員の月給の三〜五倍以上にもなったのだから、沖縄の各地から人々が吸い寄せられるように集まるのも当然だろう。統計によると、最盛期の人口は、登録した住民だけでも優に一万二〇〇〇人を越えている。未登録の人口を加えたら、その数は驚異的なものになるろう。

しかし夢はつかの間だった。一九四九年を境に、アメ

リカ軍はこの島を通じて弾薬やピストルが香港や中国大陸に流れているのではないかと疑い始めた。それらが共產党の手に渡り、蔣介石軍の脅威となることを恐れたのである。密輸を一掃すべく、厳しい取締りが開始された。この年の一〇月、台湾の二・二八事件に巻き込まれて与那国島に身を寄せていたある人の証言によると、当時島にはアメリカ軍の追手を逃れた約四〇〇人の台湾人が山中に隠れており、町長はみずから食料を持って彼らを見舞ったという。

五〇年代に入ると、島をとりまく政治的状况も次第に安定し、それにつれて密貿易が咲かせた「景気時代」のアド花もまたたく間に色褪せていった。与那国島の人口は急速に減少し、一九五〇年が約六〇〇〇人、一九六〇年は約四〇〇〇人、一九七〇年には二〇〇〇人あまりとなり、九〇年以降はついに二〇〇〇人を下回ってしまつた。日本の他の離島と同様、就職や進学の問題に加えて、物価が高く娯楽が少ない島の暮らしが、人口の持続的流出を招いている。島を訪れた私にも、親戚や孫、友人や隣人が一人また一人と島を離れて行くのを見続けるお年寄りの深い悲しみがひしひしと感ぜられた。

●新たな交流を求めて

島に活力を取り戻すにはどうしたらよいか。これが現在島民が直面する最大の課題である。町長を中心に全島民が一丸となって尽力した結果、一九八二年、与那国町は台湾東部屈指の港湾都市で、産物や資源も豊富な花蓮市と姉妹都市の関係を結んだ。姉妹都市の締結はありふれたことだが、人口一二万の大都市が相手となると、並々ならぬ努力が必要だ。物産や文化の交流はもちろん、子供たちのホームステイなどの活動においても、今後与那国島の人々は全力で対処しなくてはならないだろう。

また雄大かつ遠大な経済・貿易プロジェクトも推進されつつある。一九八七年、与那国町議会は「祖納港開港宣言」を採択した。これは県と中央政府に正式に開港を要求し、台湾に直行する定期便を就航させ、与那国町を香港・中国沿海地域・台湾からなる経済圏に接する日本の窓口として位置づけようというものだ。しかし日本政府の規定では、開港の条件として一五万トンに達する取扱貨物量が必要とされている。そこで現在与那国町では、政府に国境地域の規制緩和を求める一方で、祖納港の整備を積極的に進めており、一九九五年には二〇〇〇トン

クラスの船が接岸可能になる予定だ。港湾整備には、花蓮港から輸入した石材が使用されているという。

つまるところ、辺境の地にある与那国島は、みずから手で活路を見出さなければならぬ。産業を興し、雇用機会をつくって人材を確保するためには、国境を突破することが必要だ。「戦後のあの『景気時代』を再現したいんです」。島の責任者は、この島の理想的な未来を青写真に描いて語るたびに、いつも興奮気味にこう言うのだった。

最後に、私自身がなぜ与那国島を訪れるようになったのかを述べたいと思う。今日までの長きにわたり、多くの学者が台湾や与那国島で民族学の調査研究を行ってきた。彼らはみな台湾と与那国島の民族的関連性に関心をもった。鳥居龍蔵をはじめとして、馬淵東一、金関丈夫、国分直一、さらに戦後も多くの民族学者たちが、考古学的な発掘や測量、神話や伝説などさまざまな文化要素の比較を通じて、台湾と与那国島や沖縄との関連性、ひいては台湾と北方の日本文化との関連性を見出そうとした。しかし、現在までの研究成果では、学術上の確実な証左のようなものはわずかしかない。かくいう私も、

そこにわずかなりとも関連性を見出したいと意欲を燃やしている。「国境」がない時代にも、必ずや人々の移動と往来があったはずだからだ。

私がこの原稿を書き終えようとした頃、突然与那国島から国際電話が入った。島を訪れるたびにお世話になっている宿の主人のご子息からである。いままで一度も電話など寄こさなかった人だから、何事が起きたのかと私は仰天した。すると彼は電話の向こうでこう言った。

「女房が無事に四人目の子を産みましてね、与那国島の人口増加にちょっとは貢献しましたよ」

続けて「あなたに電話した理由だけと……」と切り出した。その頃ちょうど日本政府は、台湾の李登輝総統の広島アジア大会参加に難色を示していた。「台湾の人たちはどう思っているんですか。だけど、こんなことでぼくらの友情は変わらないでほしいな」。彼はこれを言いたかったのだ。受話器を置いた私の胸に、名状しがたい思いがあふれた。

宿のご子息は私と同年だ。与那国島に居るとき、彼の同窓会があると、きまって私を呼んでくれる。